

<書評>

## 英語教育実践研究のこれから

— 『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』の書評を通して—

菊原健吾 信州大学大学院教育学研究科  
木下愛里 信州大学大学院教育学研究科  
黒柳美結 信州大学大学院教育学研究科  
畢奇 信州大学大学院教育学研究科  
古幡知花 信州大学大学院教育学研究科  
青山拓実 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：英語教育学，英語教育研究法，実践研究

### 1. はじめに

本稿は、田中武夫・高木亜希子・藤田卓郎・滝沢雄一・酒井英樹（編著）『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』（大修館書店，2019年，xi+257pp.，ISBN: 9784469246278）の書評，ならびにそれに基づいた今後の英語教育実践研究のあり方について議論する。なお，本稿において議論する内容は，2019年度前期大学院開講科目「英語科授業研究」における発表及び議論を基にしている。

### 2. 書評

本節では，『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』の各章内で紹介されている内容について概観する。本書は全9章で構成されている。以下では，各章の内容を紹介し批評を加える。

第1章は，実践研究とは何か，また英語教師が実践研究行うことの意義について紹介している。本章では，実践研究を「教師の教育実践の質的な向上を図るために行われる体系的な探究」（p.4）であるとし，「実践の現状を理解する」タイプと「実践上の課題を改善する」タイプに分類している。この分類をもとに，これまでに英語教育において行われてきた実践研究の概略を並べることで，実践研究がどのようなものか理解できるようになっている。また，実践研究を，校内研究，実践報告，学術研究と比較し，それらを表にまとめ，それぞれの目的・意義，主体，文脈等を提示している（p.13）。例えば，実践報告の目的・意義が実践や教材の共有であるのに対し，実践研究の目的・意義は実践の理解や課題の改善であると述べている。本章を読むことで，英語教育において実践研究がどのような位置づけとして捉えられているのかが明確になる。

第2章では，小学校，中学校，高等学校，大学で行われた8つの実践研究が紹介されている。各実践を，「実践の背景」，「実施の概要」，「問い（研究課題）」，「研究方法」，「研究結果と考察」の観点からまとめており，実践例の全体像を把握するのに役立つ。これらの実践は，3章以降で再び言及されるため，他章を読み，必要に応じて本章を再読することで，各実践の内容理解を深めることができるだろう。また，本章で提示され

る「実践研究の多様な方法」をまとめた表 (pp. 22–23) は特に有用である。この表を用いることで、各実践研究における問いの種類や設定時期、研究対象やその対象に注目した時期、収集したデータの種類、データ分析の方法、研究を共有するための方法などについて一覧できる。例えば、問いの種類が理解型であり、研究対象者が学習者、データ収集を質問紙で行なった研究であり、実践が口頭発表や論文で共有されているという条件で実践研究を探ることができる。

第3章は、実践における問題意識を研究課題として洗練させるまでのプロセスが示されている。本章では、まず問いを立てる前段階として、問いが生まれるきっかけを例示している。そのため、初めて実践研究を行いたい読者や、問いを見つけることに困難を感じている読者にとって、自身の問いを探す手助けとなるだろう。次に、見つけた問いを研究課題として洗練していく過程を提案している。「良い問い」を「重要性」、「明確性」、「可能性」がある問いであるとし、この3要素の観点から問いの質を高める方法を提案している。例えば、明確性を「問いが明確であること」(p. 58)と定義し、実践研究の対象や実践内容、その効果を明確にした問いにすべきであると指摘している。その方法の1つとして、実践におけるキーワードを明確にすることが挙げられている。例として、もし問いに音読という言葉が含まれている場合、一斉読みやシャドーイングなど、異なった音読について言及している可能性がある。そこで、どのような音読であるのか明確にした問いにすることで、実践内容の精緻な振り返りをすることができると説明している (pp. 58–59)。以上のように、問いを洗練していくプロセスが具体例と共に示されており、読者は本章を参考にしながら自身の問いを洗練したり、すでにある研究課題を見直したりすることができるだろう。

第4章では、実践研究で用いられるデータのタイプを紹介している。まず、実践研究におけるデータとは何か説明されている。実践研究におけるデータを「文字や音声、映像によって記録された1次情報のうち、教師が立てた実践研究の問いに答えるための根拠となる情報」(p. 72)とし、その例を挙げている(英作文、授業ビデオ、ワークシート等)。また、データが実践者の問いに答えるための手段になることを、具体例を使って示している。この例をみると、教師が普段から使用している教材や収集した資料をデータとしてみなすことができ、実践研究に親しみのない読者でも、日頃の授業実践と実践研究を結びつけられるだろう。次に、本章は実践研究においてどのようなデータをいつ集めるべきか決めるための指針を示している。まず、どのようなデータを集めるか決めるときは、「対象の分野」、「対象者」、「データのタイプ」という3つのレベルで検討することを提案している。例えば、対象の分野として、能力・知識・技能に関心がある場合、スピーキングの発話語数やライティング活動での英作文等を集めることができるとしている (p. 76)。また、実践研究における問いが、実践の現状を理解したいのか、もしくは実践における課題を改善したいのかという違いに応じて、データ収集の時期に違いがあることを説明している。例えば、実践研究で課題の改善を目指す場合、授業の前後でデータを収集し、結果を比較することで課題が改善したかどうか検証できるとしている (p. 79)。なお、本章の最後には、上記の内容を含めた議論をまとめ、データ収集時に考えるべきチェックリストを提示している。読者はこのリストを活用することで、自身の実践研究におけるデータのタイプや収集時期について整理することができるだろう。

第5章は、実践研究におけるデータ収集の方法について説明されている。データ収集の方法について、量的データと質的データに分け、「準備・計画」、「実施」、「記録・整理」の3段階を説明している。第5章前半では、量的データを収集する方法について紹介している。特に、児童・生徒の能力・知識・技能について知りたい場合に使用するテストや課題、心情・動機・認識について知りたい場合に使用する評定型の質問紙に焦点を当て、上記の3段階をどのように進めていくか解説している。テストや課題の例としてスピーキングテストにおける評価方法の例を挙げるだけでなく、表計算ソフトへの記入方法の例も示されている。このように具体的な記録・整理の方法が提示されているため、研究に慣れていない読者でも、データ入力時に感じる迷いや不安を軽減できる。第5章後半では、質的データの収集法について紹介されている。具体的には、「質問紙（自由記述型）」、「授業の感想・振り返り」、「授業観察メモ・授業日誌」、「インタビュー」、「授業ビデオ」、「授業検討会」が挙げられており、それぞれの収集法においてどのように準備・計画、実施、記録・整理を行うか紹介している。例えば、インタビューの準備・計画においては必ず尋ねたい質問項目を事前に記録し、聞き取りの内容を豊かにするために質問内容を吟味したりすべきだといった助言がある。インタビュー実施時は録音ミスを避けるために複数の媒体で録音したり、記録・整理の時はデータの損失を防ぐためにデータをバックアップしたりすべきといった、研究において起こりうる不測の事態を未然に防ぐための方略も述べられている。

第6章では、データ分析方法について、量的分析と質的分析に分け、基本的な手法を概観している。第6章前半では、量的分析に関わるデータの扱い方が述べられている。量的分析を「数量化されたデータを分析すること」(p.119)とし、その基本的な手法として数値を要約することとデータのばらつきを可視化することが挙げられている。要約値として平均値、中央値、最大値、最小値、標準偏差を、データのばらつきを可視化する方法として棒グラフ、ヒストグラム、箱ひげ図、散布図を挙げ、それぞれの特徴を説明している。また、平均値の産出ではデータのばらつきを明らかにできないことを、架空のテストデータから得られた要約値とグラフを用いて説明し、平均値以外の要約値やグラフの必要性を説いている。量的分析に不慣れな読者でも、分析においてデータのばらつき度合いを示す重要性が納得できる内容となっている。さらに、第2章で示された実践研究から、データを要約したり、データのばらつきを可視化したりする分析事例が示されている。第6章後半では、質的分析を行う方法がまとめられている。第2章で紹介された実践研究や他の実証研究から、自由記述による質問紙、リアクションペーパー、授業ビデオ、インタビュー、英作文の質的分析例が紹介されている。各分析例は、「データを読み込む」、「データから必要な箇所を抜き出す」、「気づきや考えたことをメモする・要約する」、「要約されたデータを整理する」という4つの段階からまとめられている。各段階の説明には、適宜研究で用いられた実際のデータや、コーディングの方法、生成されたカテゴリーなどが提示されている。例えば、質問紙の分析例では、自由記述の回答とそれに対するコーディング、教師の気づきを加えた入力例、さらに、コーディングの結果を頻度に数値化した例が紹介されている。自身の実践研究と関連のある分析方法について、紹介されている実践研究を併せて読むことで、より理解を深めることができるだろう。

第7章では、分析したデータの解釈方法について紹介されている。前述の5章と6章に合わせ、データ解釈の方法を量的データ分析の解釈と質的データ分析の解釈に分けて解説されている。第7章前半は、量的データ分析の解釈を扱っている。特に、集団の特徴を見るための評定型の質問紙と、集団の変容を見るためのテストのデータ分析結果について、第2章で示された研究事例を参考にしながら、解釈の方法を紹介している。例えば、藤田（2017）の研究で行われた、実践前後のスピーキングテストの結果を具体的な数値で示し、どのような解釈をすることができるか議論している。第7章後半では、質的データ分析の解釈方法を解説している。例えば、集団の特徴を見るために使用する自由記述型質問紙の分析結果や、個人の変容を見るために使用する生徒の日記や授業日誌等の分析結果の解釈方法について説明している。量的データ分析の解釈と同様に、第2章で示された実践研究例をもとに、質的データ分析の解釈の方法が紹介されている。例えば、生徒個人の変容に焦点を当てた宮崎（2016）の研究をもとに、どのように生徒の日記を解釈したか解説されている。

第8章では、実践研究の共有・公開について解説されている。共有を「実践研究について語ったり口頭発表をしたりすること」（p.174）、公開を「実践研究を論文の形にして発表すること」（p.174）とし、それぞれにおいて想定される聞き手や読み手、どのようなフィードバックが得られるかという観点からまとめている。読者は、本章を読むことで、自身が実践を伝えたい相手、どのようなフィードバックを得たいかを考慮しながら、適切な共有または公開の方法を選ぶことができる。また本章は、実際に実践研究を共有・公開するための機会に関する情報提供をしている。具体的な情報サイト、雑誌や新聞、研究会や学会、学会誌等の名前や、発表申し込みに関する手順を紹介している。例えば、実践研究を発表した時、発表要旨、発表題目、キーワード等を学会ホームページの申し込みサイトに入力する必要があるが、本章では要旨作成やキーワードの選定の助言が書かれている。さらに、論文執筆や投稿、発表資料の作成方法まで細かく解説されている。実践研究の口頭発表や論文の基本的構成として、序論、実践の背景、結果と考察、結論を提案し、それぞれについてどのようなスライドを作ることができるか例示している。実践研究を始めたが共有や公開について不安や疑問がある読者を手助けする章となっている。

最終章である第9章は、本書で紹介されてきた実践研究の著者達が、実践研究を行って得たものを紹介している。また、実践研究で直面する課題とその対処法を提案している。まず、実践者の語りでは、実践で得られる様々な学びや直面する悩みが実践者の具体的な経験をもとに紹介されている。例えば、河合氏のエピソードとして、実践を振り返り、言語化することによって、「生徒につけてほしい力と実際の指導内容が噛み合っていない」（p.219）ことに気づき、改善を行うことができたことを紹介している。他にも、山岸氏のエピソードとして、明確な問いを立てるまでの過程やデータ分析で感じた悩みなどが紹介されている。実践研究で直面する課題とその対処法については、多くの教師が感じる時間不足をはじめ、同僚の協力が得られないこと等への対処法が提案されている。こうした実践者の語りや、実践研究における問題への対処法に、共感したり、励まされたりする読者も少なくないだろう。

### 3. これからの英語教育実践研究のさらなる発展に向けて

前節では、『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』の各章についてレビューした。本節ではそれを踏まえ、今後の英語教育研究における実践研究のあり方や、その方向性について議論する。本書の第8章では、「実践について語ろう・話そう・書こう」というテーマのもと、実践研究を行う英語教師が、どのようにして公開の場を見つけ、どのような方法で実践研究の成果を報告することができるのか、ということに言及している。しかしながら、これまで研究者による実証研究や調査研究が発表の中心であった日本国内の英語教育系学会は、実践研究を受け入れる場としての準備ができていだろうか。本節では、国内の英語教育系学会の学会誌・紀要を取り上げて考察する。

#### 3.1. 英語教育系学会誌・紀要の実践研究の推進への取り組み

近年の日本国内外における英語教育系学会の一つの動向として、学校教員が実践研究を報告するための機会が徐々に提供され始めているという点が挙げられる。例えば、国内の英語教育系学会においては、学会誌・学会紀要に「実践報告」や「実践論文」と呼ばれる実践研究を投稿するためのセクションが設けられている。本稿では、浦野ら(2016, pp. 58–59)が国内の主な英語教育系学会としてまとめた学会に注目し、学会誌・学会紀要が投稿者に向けて公開しているガイドラインにおいて、実践研究についての成果報告の在り方がどのように言及されているか、例を取り上げて議論する。表1は、以下で議論する英語教育系学会の学会誌・紀要における実践研究報告に関する記述をまとめたものである。

本稿において取り上げるのは、小学校英語教育を対象とした学会である日本児童英語教育学会(JASTEC)と小学校英語教育学会(JES)、小学校英語教員から大学に所属する研究者まで幅広い層の会員を有する全国英語教育学会(JASELE)とその地域支部組織である関東甲信越英語教育学会(KATE)、中部地区英語教育学会(CELES)、外国語教育と教育メディア利用を学会の大きなテーマとして掲げる外国語教育メディア学会(LET)、そして英語授業のあり方について理論と実践の両面から議論し、多く英語教師が会員として参加する英語授業研究会(英授研)の7組織が出版する学会誌・紀要である。

はじめに、小学校英語を主な議論の対象とする学会(日本児童英語教育学会、小学校英語教育学会)が出版する紀要(*JASTEC Journal*)・学会誌(*JES Journal*)では、どちらも実践報告を対象とする論文投稿セクションが設定されていることが分かる。しかしながら、具体的に紀要・学会誌として、どのような内容を実践研究の成果報告に求めているのかということが明らかとなるガイドラインはなく、実践研究の定義は曖昧である。

次に、中部地区英語教育学会ならびに関東甲信越英語教育学会、ならびにこれら2つの学会の母体である全国英語教育学会の出版する学会誌・紀要の投稿規定・執筆要領をみると、これら3つの学会は、それぞれ実践報告・実践論文のセクションを設定していることがわかる。そのうち中部地区英語教育学会紀要(*CELES Journal*)、関東甲信越英語教育学会誌(*KATE Journal*)は、それらのセクションで取り扱う実践報告についての定義を明らかにしている。例えば、*KATE Journal*における実践報告の定義は「教師が授業改善のためによいと考える方法を実践し、その結果を記述し、考察するもの」とされており、授業改善に根ざした議論に焦点を当てていることがわかる。Honda et al. (2018, p. 91)によれば、*KATE Journal*における実践報告は1985年から2017年の間に38本出版されている。また、全国英語教育学会紀要(*Annual Review of English Language Education*)では、査読の際の観点

を執筆要領の中で明確に提示することにより、執筆者が自身の実践のどのような側面に焦点を当てて報告すればよいかということが明らかにされている。さらに、外国語教育メディア学会機関誌 (*Language Education & Technology*) は、編集規定において具体的に実践報告に期待する内容について言及していないものの、機関誌投稿論文チェックリスト (<http://www.j-let.org/doc/2018checklist.docx>) において7項目を「実践報告のチェック項目」として記載している。このように査読者が実践報告を審査する際に最低限確認する項目を執筆者に対して広く公開することで、機関誌による実践報告の捉え方が執筆者に明確に伝わる仕組みを作っている。

最後に、小学校から高等学校の英語教員が主に在籍する大規模な研究会である英語授業研究会が発行する英語授業研究会紀要においては、研究紀要投稿規定の中で「審査にあたっては学会員の研修、指導技術や専門的資質向上に資する研究であることを旨とし、教育的示唆に富む原稿を採用する。」と記載し、学会設立の趣旨と論文採択の方針を提示している。

表1. 日本国内の英語教育系学会が出版する学会誌・紀要における実践研究報告に関する記述のまとめ

ジャーナル名 (出版社/団体)	実践研究に関する記述
日本児童英語教育学会研究紀要 <i>JASTE Journal</i> (日本児童英語教育学会)	<b>投稿規定 (2018年版)</b> 20. 紀要の原稿の種類(カテゴリー)は、「学術論文」「学術研究資料」「実践報告と提言」のいずれかとする。
小学校英語教育学会誌 <i>JES Journal</i> (小学校英語教育学会)	<b>執筆要領 (2019年版)</b> 2019年度の全国大会で発表(口頭またはポスター)されたもので、1人1編(共同研究も含む)とし、執筆者は、研究論文か実践報告かを申告すること。
中部地区英語教育学会紀要 <i>CELES Journal</i> (中部地区英語教育学会)	<b>投稿規定 (2019年版)</b> 1. 「実践報告」とは、教育現場において執筆者自身が行った比較的長期的な英語教育に関する指導実践に基づき、実践内容を公開し共有すること、あるいは教材資料の集積を目的として執筆されたものを指す。(中略)「実践報告・調査の報告」の審査は、「論文構成」「実践・調査意義」「課題設定」「内容の充実度」「英語教育との関連性」の観点を総合的に勘案して行う。
関東甲信越英語教育学会誌 <i>KATE Journal</i> (関東甲信越英語教育学会)	<b>投稿規定 (2019年7月改訂)</b> また実践報告 (practical report) とは、教師が授業改善のためによいと考える方法を実践し、その結果を記述し、考察するものとする。

全国英語教育学会紀要  
*Annual Review of English  
Language Education in Japan*  
(全国英語教育学会)

#### 執筆要領 (ARELE 第 31 号)

実践論文とは、関連する先行実践例や先行研究を踏まえて、授業改善に有効であると考えられる方法を実践し、その内容と結果を適切に記述することで、授業改善や実践的研究の発展に寄与する情報を提示しているものである。審査は、下記の観点に基づいて行われる。

独創性：関連する先行実践例を踏まえて新たな実践を行い、その実践方法に適切な意義づけ（よいと考えた理由づけ）を行っているか。 実践内容・省察：実践内容が明確に記述・解説されており、実践の結果について、具体的根拠に基づく、的確な考察・省察が行われているか。 論理性・表現：論旨に一貫性があり、表現が適切か。 意義・貢献：結果や考察の内容は授業改善や実践的研究の発展に寄与するか。 全体評価：実践論文として全体的な完成度が高いか。
--

外国語教育メディア学会機関誌  
*Language Education &  
Technology*  
(外国語教育メディア学会)

#### 編集規定 (2017.8.5 改訂)

##### 第 6 条

3 実践報告については、「独創性」「妥当性（主張を裏付けるデータの質と量）」「充実度」の観点から審査し、5点満点で評価する。

英語授業研究会紀要  
(英語授業研究会)

#### 研究紀要投稿規定

2. 原稿は未発表のものに限る。なお、「学会は英語授業のあり方に関し、理論と実践の両面からの研究を目的とする」（会則第 2 章 第 2 条）ことから、審査にあたっては学会員の研修、指導技術や専門的資質向上に資する研究であることを旨とし、教育的示唆に富む原稿を採用する。
3. 原稿は、論文、研究ノート、実践報告の部門に分けて掲載する。原稿掲載の希望部門については、下記 10. に従い、紀要編集委員会に知らせること。

(注) 各学会誌・紀要の投稿規定等は 2019 年 10 月の時点で最新のものを各学会のウェブサイトより取得した。

### 3.2. 実践研究論文を書くために

前節において紹介したように、各学会誌・紀要における実践研究の報告に向けた取り組みは未だ不十分な点が存在する。特に、本書の書評を行う中で、本稿の著者のうち、現在大学院において学術研究のプロジェクトを進め、将来英語教員として英語教育実践研究を行う可能性のある大学院生から挙げられた懸念事項として、「実践報告・実践論文の書き方のあり方」がある。例えば、本書の第 3 章で説明されているように、学術論文における研究課題の立て方と実践研究における問いの生み出し方には異なる点が多く存在する。実

実践研究を論文として執筆する際には、研究課題の説明において学術論文で用いられるような先行研究についての客観的なレビューの他に、実践研究者の日頃の英語教育実践における主観的な振り返りや語りを、研究背景に関する情報として論文の中で言及する必要がある。しかしながら、前節でまとめた国内英語教育学系学会誌・紀要の中には、論文の構成を指定しているものの、内容は学術研究、実践研究ともに同様のもの執筆要領を示しているものが見られた（小学校英語教育学会等）。

これに関連し、竹内（2019）は英語教師に対して調査を行い、それを基に、実践報告の際に必要と考えられる情報を提案している。具体的には、実践の担当教員に関する情報、特に教員の持つ生徒・児童観、教育観、生徒との関係性、また実践の成果に関わる情報として担当教員自身による実践の振り返りが挙げられている。さらに、その他の情報として、実践の背景と理由、実施上の改善点・失敗のポイント、児童・生徒のつまづきのポイント、今後の方向性など、学術論文には通常載せられることのない情報を報告することの重要性を強調している。また、実践の写真やビデオ、利用した教材の情報と実物などについての情報も付属物として提供することを提案している。このように、実践研究の成果を公表するためには、学術論文とは異なった論文の書き方や、さらには異なった報告の手段（ビデオなどの活用など）が今後重要になってくるのではないかと考えられる。そのため、今後の英語教育研究における実践研究をさらに推し進め、成果の共有を促進するためには、国内の英語教育系学会や研究会による実践研究報告へのさらなる理解と協力が必要となるだろう。

#### 4. おわりに

本稿では、『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』の書評を通し、英語教育研究における実践研究とはどのようなものなのか、英語教師はどのように実践研究を行うことができるのかについて概観した。さらに、現在の日本国内で活動している英語教育系学会は実践研究についてどのような体制を整えているのかについて検討した。本書を通して、英語教師による実践研究についてのよりよい理解が英語教育研究に携わる研究者や団体、日々実践に取り組む英語教師に対して共有され、より多くの実践研究の成果が将来的に共有されることに期待する。

#### 文 献

- 藤田卓郎 (2017). 「英語が苦手な学習者のコミュニケーションを図ろうとする意思と英語運用能力の育成」 *Annual Review of English Language Education in Japan*, 28, 335–348.
- Honda, K., Hoshika, M., Aoyama, T., Someya, F., & Yamamoto, T. (2018). A systematic review of articles in KATE 1–31: Changing trends in the field of English education. *KATE Journal*, 32, 85–98. [https://doi.org/10.20806/katejournal.32.0\\_85](https://doi.org/10.20806/katejournal.32.0_85)
- 宮崎直哉 (2016). 「All in English の授業を多用したことによる生徒の表れ」『中部地区英語教育学会紀要』第 45 号, 185–192.
- 竹内理 (2019). 『英語授業で大切なものは何か—授業実践方向の充実をめざして』第 19 回 小学校英語教育学会北海道大会基調講演 (2019 年 7 月 20 日)



書評：『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』

田中武夫・高木亜希子・藤田卓郎・滝沢雄一・酒井英樹 (2019). 『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』 東京：大修館書店.

浦野研・亙理陽一・田中武夫・藤田卓郎・高木亜希子・酒井英樹 (2016). 『はじめての英語教育研究—押さえておきたいコツとポイント—』 東京：研究社.

(2019年12月 5日 受付)

(2020年 3月13日 受理)